

# オーストラリアの印象

加本一久

## 日本を振り返る

よく詩句等に瀬戸内海を「海の銀座」とも言い、変化の多い島々に行き交う船のおびただしさを形容されている。

確かに大小さまざまの船が昼夜を分たず入り乱れている風景は都会の繁華街の混雑にも喩えられよう。

私共はこうした風景や形容詞をこれまで何気なく見聞きしていた。

然し一とたび祖国を離れて外国の風土に接し再び日本の港に近づいてみた時、何とそれは余りにも悲しい現実であり、胸をつく生存競争の激しさがひしひしと迫る感じ以外には如何なる美文的形容もむしろコッケイなものである事を知るであろう。

そして更らに陸に上った時押し合いへし合う混雑と前後左右にとび交る車のはげしさに神経がすり減る思いと共に、今更乍ら過剰人口がせまい陸からはみ出して海にまではらんしているような錯覚さえ起るものである。

私はジャージーの護送を仰せつかってオーストラリアに使いし、船に乗って日本を離れる迄は矢張りその環境の中に馴れきって別段顧慮することもなく過してきた。生活の苦しさも、仕事の煩わしさも何も彼もこれが世の中だと漠然たる諦観のもとに生きてきたが、扨て、オーストラリアの風土に接し、彼等の生活、産業、経済、社会施設等を見聞して以来彼等の環境が日本と比べて余りにも恵まれていることを羨むと共に、若し世界の平和を希求し、人類の平等なる幸福を支配する神様があるとすれば、現在の国土と国民の配分に於て日本とオーストラリアは全く正反対で

あり、不公平な立場におかれていることを訴えられるものなら只それのみを叫び度いとさえ思う。

「たわ言を言うな！日本が無暴な戦争を仕掛けておいて敗けた者として当然の報いじゃあないか！」と反問する人もあろうが、このアンバランスの状態が平和と言う名のもとに何時までも放任され得るものかどうかは常識的にも至難なことであるし、余りも過酷な現実だと言うことを恐らく皆が気づいてくることであらう。

私は特に或る意図のもとにこうした書き方をするものでない。私がオーストラリアに行って日本を振り返り、我々日本人お互いを想う時に、その惨めさを最も強く印象つけられたことに外ならないのである。

冒頭から屁理屈を並べて悲憤こう慨してみたところで今更らどうにもならないし、興味のない話であろう。

頼りない記憶をたどって赤毛布の旅の記に移る。

## 船と船たび

私共一行の乗った船は日本郵船会社の貨物船で約5,000 t程の船だった。日本郵船はイニシアルをとって通称N・Y・Kと言い大阪商船O・S・K、と共に日本の代表的船会社であり世界商船界にも有名な存在である。持ち船は戦前のそれに及ばないと言っても、O・S・K、と共に矢張りしにせの貫禄を保っている。私等自身の体験ではないが一面会社の伝統として封建的、官僚的だとの風評もないではない。

本船は元英国船で言わばセコハンで船令は30年を越して居り、ディーゼルエンジンとは言い乍ら最大速

## 岡山畜産便り 1956.06

力は12マイルに及ばない代物だった。この速力は恰度自転車の速さ位なもので神戸ーシドニー間2,000里を走るのだから如何に昼夜休みなく走ったとしても17日間と言う長い船旅を必要とするのも当然である。

元来オーストラリア航路には各国共優秀船は配置していないそうだ。それは距離や貨物量の関係もあるが航路は他の欧米航路に比べて平穏な点もあるようである。

船の乗組員は船長以下52名も乗って居り、乗客は我々一行6名が全部だった。

外国船路の船には長い期間海上生活をする関係上食べ物は勿論大ていの事は船の中で間に合う。貨物船と雖も船室の外にサロン、食堂はあるしサロンに碁、将棋、麻雀、レコード、図書、ラジオ等備えつけてある。散髪もやってくれるし、洗濯物のアイロンも掛けてくれる。

私共が神戸を出帆したのが寒風肌を刺す12月28日の夜だった。それが太平洋に出てものの3日もすればもう冬服どころかジャケットさえ脱がずにおれなくなる。

正月が恰度4日目だったが暑い暑いと言い乍ら「新年おめでとう」と言うのは何か正月らしい感じがしない。数十年の週間で正月と言えば寒い時期であり、炬燵を想像し雪だるまを思い出す。熱かんでしこたま酔っぱらわなきゃ正月をしたような気分にならなかったことと比べて暑くて而も規律正しい船内の正月は勝手が違ったものだった。

それでも船ではマストに門松を挙げ食堂にはしめ縄を張りお鏡を据えて、それこそ山海の珍味の料理を出された。私共が普通の家庭では見られないような御馳走をし祝酒をくみ交わした。

而かもそれらの料理は如何に手をつけまいと丸で

残ろうと1回切りで全部海の中に捨てるのだからその点はぜい沢なものである。

船には5人のコックが専門に炊事をやっているが航海中は洋食と和食は1日交互に出る。

船旅で困ることは美食と運動不足によって盛り上がるセクシャル・アペタイトであるが之も次第に諦めから麻痺の状態に移行する。特に御断りするまでもなくこれは唯船中のみならず帰航迄3ヵ月余と言うものの船員の全部も同様であったことと想う。

前後左右何処をみても海許りの視界に小さな島でも見えるとたまらなく恋しいものである。殊に硫黄島、アナタハン島等は悲惨な歴史と話題を賑やかした島々として見え初めから消え去る迄眺めすかして過ぎた。